京都大学	博士（医学）	氏名	宮　地　由　佳
論文題目	Lists of potential diagnoses that final-year medical students need to consider: a modified Delphi study （卒業時の医学生が想起すべき鑑別疾患候補リスト）		

（論文内容の要旨）

【背景】医学生への臨床推論教育では、診断仮説を立てずに医療面接や身体診察の手技だけを網羅的に教え評価する方法が、国内外の多くの大学で伝統的にとられてきた。しかし認知負荷理論や診断エラーに関する近年の研究から、診断早期からの仮説の生成と検証を軸とした推論プロセスの教育・評価の重要性が高まっている。診断仮説の教育方法として効果が注目される概念に、対照学習、則ちある症状・症候の原因となりうる疾患と対立候補となりうる他の疾患との臨床的特徴を比較・対比することで、疾患像の構築を促す学習法がある。しかし医学生が卒前に習得すべき臓器横断的な諸症状・症候に対し、どのような疾患が鑑別診断の候補として挙げられるべきかについての国際的なコンセンサスは得られていない。日本では２０１６年に医学教育モデル・コア・カリキュラムが改訂され、文献レビューおよびパブリックコメントを経て３７の症状・症候・病態生理に対する診断候補リストが導入されたが、作成過程に関係者の専門性の偏りが影響を及ぼしていることは否定できなかった。本研究では、医学生に対する臨床推論教育の専門家間の合意に基づき、この３７症状・症候の鑑別疾患として想起されるべき疾患を明らかにした。

【方法】臨床推論教育に造詣が深く、同モデル・コア・カリキュラムに精通する専門家として、大学教員および臨床研修病院指導医２３名を日本全国からリクルートし、修正デルファイ法を用い、診断候補となる疾患について合意形成を行なった。上記のモデル・コア・カリキュラムの掲載リストを初期リストとし、卒業時の医学生がその疾患を想起できるべきかという観点から５段階のリッカート尺度により匿名で評価され、他に含めるべき疾患があれば追加された。合意基準は専門家の同意率が７５％以上、かつ、５段階評価の平均値が４以上で標準偏差が１未満と定義した。専門家による追加疾患の意義が吟味されやすいよう、第一ラウンドで合意形成基準を満たした疾患も、追加疾患とともに第二ラウンドで再びその採択可否を評価された。リストを必要最低限の項目で構成するため平成３０年度国家試験出題基準の掲載疾患に限定した。

【結果】２回のラウンドにより、日本の医学生が卒業までに習得すべき３７の症状・症候・病態生理に対する鑑別疾患の候補として、国家試験出題基準の「必修の基本的事項」の掲載疾患から成る２７５の基本的項目が同定された。さらに「必修の基本的事項」が将来的に変更される可能性を考慮し、「必修の基本的事項」以外に同出題基準に含まれる疾患について追加ラウンドを実施し、必修以外の６７項目が同定された。各ラウンドの回答率は第１回、第２回とも９６％、第３回は８７％であった。

【結語】医学生が卒業してすぐ求められる臨床推論能力を明らかにした本研究は、卒前から卒後にかけて一貫した臨床推論の教育・評価の改善に資することが期待できる。作成された鑑別疾患の候補リストは、学習者の研修科や指導医の専門性に関わらず、対照学習を促すことで初期仮説生成の教育に役立つ。またリストの項目は日本の教育状況に焦点を当てたものではあるが、その内容、および、より正確な専門家の合意形成を促しうる本研究のラウンドのデザインは、他国にも汎用可能である。

（論文審査の結果の要旨）

本研究は、平成２８年度改訂版の医学教育モデル・コア・カリキュラムに掲載された３７の症状・症候・病態生理に対する鑑別疾患候補リストの妥当性検証を目的とし、将来選択する専門分野の別に関わらず、卒業するレベルの全ての医学生が最低限想起すべき鑑別疾患の候補を、医学生に対する臨床推論教育の専門家２３名による修正デルファイ法を用いて同定したものである。これらの鑑別疾患候補は、卒業時レベルの医学生がその疾患を想起できるべきかという観点から５段階のリッカート尺度により匿名で評価され、他に含めるべき疾患があれば追加された。合意基準は専門家の同意率７５％以上、かつ、５段階評価の平均値４以上で標準偏差１未満と定義した。合意を絞り込むため、平成３０年度国家試験出題基準の「必修の基本的事項」掲載疾患に限定した。３回の評価ラウンドにより、国家試験出題基準「必修の基本的事項」からなる２７５の基本的項目と、「必修の基本的事項」以外に出題基準に含まれる疾患からなる６７項目が同定された。

以上の研究は、医学部卒業時レベルの医学生、すなわち入職時点の全ての研修医に求められる臨床推論能力についての根拠の１つとして、我が国における、卒前・卒後教育における根拠に基づいた医学教育の推進に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、令和 3 年 11 月 11 日実施の論文内容とそれに関連した研究分野並びに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。